

とうしゅ こう じん ぞう せき  
旧頭首工を人造石で作った

はっ とり ちよう しち  
服部長七

服部長七は、1840(天保11)年、碧海郡棚尾村(現碧南市西山町)に生まれた。父の後を継いで左官業を営んでいたが、廃業し職を転々とした。その後、醸造業や饅頭屋などを経て、1873(明治6)年、34歳のときに、水道水の濁りを除去するためのろ過器を「たたき」で作ることを考案した。このとき、たたきの有効性に気づいたことがきっかけとなり、再び左官業を開業し、「たたき屋」と名乗っていた。

1876(明治9)年にたたきの技術を発展させて、人造石を発明するに至った。当初は人造石とは呼ばず、「長七たたき」と称していた。

1877(明治10)年、第1回内国勸業博覧会で、長七に運命的な出会いが待っていた。長七は、この博覧会会場土間のたたき工事を落札していたが、同時に会場入口の泉水池の工事も請け負っていた。この池の工事計画はずさんなものであり、指定通りの工法では池の噴水が機能しないことを長七は案じていた。とはいえ指定通りの工事を行うしかなく、その予想は的中したが、指定工法での施工を1か所にとどめておいた長七の判断により、修正箇所は最小限で済んだ。この博覧会の責任者だった後の子爵、品川弥二郎は、この一件を見抜き、長七の確かな技術とその人柄を高く評価した。品川は、農商務大輔、内務大臣等を歴任していくが、長七の実力と心意気のよき理解者であり、大きな後ろ盾ともなった。出身地である愛知県以外でも長七が事業に参画できた背景には、品川の存在が非常に大きい。

また、たたきが「人造石」と呼ばれるようになったのには、次のような逸話がある。1881(明治14)年、東京上野で開催された第2回内国勸業博覧会の準備で、長七の仕事を見ていた農商務省の雇い外国人技師が、



写真提供:岩津天満宮

「この人造石は何でできているのか」と問われたことから付いたという。これ以降は、自分のつくった“たたき”工作物を人造石と呼ぶようになったと言われている。

長七の最初の大規模土木工事は服部新田(現在の高浜市)の築堤工事で、宇品築港工事(広島市)など各地で実績を重ねた。明治用水管内では、旧堰堤や家下川暗渠(葭池樋門)、中井筋末端の高浜発電所などがある。この家下川の暗渠は現在も残り、長七の銘板を読むことができる。また、明治用水水のかんきょう学習館所蔵の旧堰堤の設計書や図面は、当時の“たたき”の配合がわかる貴重な資料である。

服部長七の晩年は、1904(明治37)年に一切の事業から手を引いた後岡崎市にある岩津天満宮に隠棲し、79歳で波乱に満ちたその一生を閉じた。

### 「たたき」とは?

真砂土に石灰・砂利を特殊な配合で混ぜ、わずかな水を加えて木片で打ち固めた素材。

「三和土」と書き、セメントがなかった時代の人造石工法として大規模な土木工事にも用いられました。

### 旧堰堤(豊田市室町)と 岩津天満宮(岡崎市岩津町)

